

シネマ通信

第24号(2026年9月16日)



モネと時間旅行

第24回鑑賞作品

監督・脚本／セドリック・クラピッシュ「ダンサー イン Paris」

出演／スザンヌ・ランドン「スザンヌ、16歳」、アブラム・ヴァブレ、ヴァンサン・マケーニュ「画家ボナール ピエールとマルト」、ジュリア・ピアトン「最高の花嫁」、ジヌディーヌ・スアレム「パリのどこかで、あなたと」

パリで暮らすごく普通の家族たち。ある日、面識のない親族一同が呼び出され、共通の先祖アデルが遺したノルマンディーの屋敷を土地開発のために売って欲しいと迫られる。それぞれの家族を代表する4名が、閉ざされたままの屋敷を調査するために、まだ見ぬ草原へと向かうことになる。そこで4人が発見したのは、白いドレス姿の女性を描いた印象派らしい一点の絵画だった。この女性が謎の祖先、アデルなのか？作者は誰なのか？疑問を解決するために、彼らはベルエポックのパリへと旅立つ・・・

パリの街と人々を、静かなトーンで描き続けるセドリック・クラピッシュ監督の最新作。世界中で250万人を動員したヒット作が、モネ没後100年のメモリアルイヤーに日本で公開されます。

パリとノルマンディー
互いに知らぬ親戚4人が
共通の祖先の足跡を辿り
ベルエポックのパリへ



About Them

「モネと時間旅行」の監督・脚本を手がけたセドリック・クラピッシュは、1961年、パリ郊外のヌイイ＝シェル＝セヌで生まれました。高等映画学院の受験に失敗した後、ニューヨーク大学で映画制作を学び1985年に帰国。レオン・カラックス監督の「汚れた血」では照明部員として働き、同時に短編映画も制作しています。転機となったのは1992年、初の長編映画「百貨店大百科」がセザール賞にノミネートされたこと。1996年の「猫が行方不明」では、ベルリン映画祭の映画批評家協会賞を受賞し、監督としての地位を確立しました。その後も市井の人々を温かいまなざしで描き、「ニューヨークの巴里夫」「お帰り、ブルゴーニュへ」「パリのどこかで、あなたと」「ダンサー イン Paris」と中ヒットを飛ばしています。

本作は今までとはちょっと異なり、ミステリアスな設定。現代と19世紀を行き来するなかで、どんな真実が浮かび上がるのか？胸躍る映像体験になりそうです。モネを初め、19世紀に実在した芸術家たちが次々に登場し、観客を印象派の聖地へと誘います。



About Something

欧米の映画界では、毎年、多くの“ナチもの”が制作されます。これは私が付けたジャンル名ですが、要するに第二次世界大戦時のナチスや、それに翻弄された人々をテーマとする作品群です。不謹慎かも知れませんが、このジャンルには外れがないというのが私の実感。極凶の設定だからこそ、人々を惹きつけるドラマや感動が生まれやすいのではないのでしょうか。先日は、そんな“ナチもの”の一つ「白パンと独裁者」を見てきました。

舞台は第二次世界大戦末期、ドイツ北部のアムルム島。ナニングは、本土から母の生家のあるこの離島に疎開してきた12歳の少年です。上空を戦闘機が飛んでも、小さな離島に爆弾が落とされることはなく、食糧不足と村の悪ガキたちによそ者扱いされる以外は、平穏な日々が続きます。しかし、ヒットラーを崇拝する母は、その死のニュースに打ちひしがれ食欲もなくなる。唯一、食べたいと言った蜂蜜とバターを塗った白パンを得るために、ナニングが孤軍奮闘するという物語。見終わったとき、正直、少々物足りなさを覚えました。それは多分、“ナチもの”に共通する生死をかけたスリリングな展開がなかったからでしょう。しかし、私の勝手なジャンル付けを忘れれば、苦難の時代を懸命に、優しさを忘れずに生きた一人の少年の成長譚として、十分に楽しめる佳作です。終戦後、一家は島の家を売りに出し本土に永住することになりますが、そのときの少年二人の会話が印象的。島で唯一の友にナニングが「結局、僕はアムルス人にはなれなかった」と別れを告げると、島の少年は「これで君は本当のアムルス人になったんだよ。島の人間はみんな出て行く」と返します。この映画で、私が一番興味深く感じたシーンです。そして思い出したのが、シチリアの田舎町の映写技師と少年トとの友情を描いた「ニュー・シネマ・パラダイス」。技師は青年となったトに「島を出ろ。決して戻るな」と、諭します。ローマに出た青年は30年間一度も母の居る島には帰らず、映画監督として大きな成功を収めます。果してトは、島を出たことで本当のシチリア人になったのでしょうか？映画では、トがどんな映画を創ったかは語られていません。しかし、彼の全ての作品の根底にはシチリアで過ごした愛おしい時間へのトの想いが、静かに息づいていることでしょう。